溫故新集

通之助筆





色の事有

一 臨と云字は手先にて長き流一同ふ二人往

究有しに強く流し先へは座敷なり

見人如和之の事也

一 手長と云事臨終の事に請ひ色の事へ

渡しことと云又手長は請ひ座敷に持来する

と色々と云なり



一　手長膳持様の事　文書院の膳ハ乳分にて
持出申し膳の下に右のことく持て
少々膳の中程を取て持前を本膳之
渡申し

一　宮仕ハなとの中　公家方の膳之式ハ小さくハ

一　魚の時ハ長く持とハ持出し扇持る也

一　給時直ニ持参ハ下尾て膳を左へ持初より
さるる之系之口伝

一　膳据るの次第の事　大膳と種子を右に付ハ
二の膳次第二の膳之二の膳右分ハ三の膳之

一　膳と右の手にて中ハ分の付ハ膳と向拝に
持出る合　一度に右へし　膳と三の膳せかると
三方の様分ハ実ハ右様と実ハ後ニ膳を

ト云生れのまゝ實右にて持さと見抜
指をかけ押へ候ゆとして少退き左へ
向ひ抜き冷之へし何茂すへの此分と
後に而さ申渡候常に肝要之出陣へ候
に付いかさ小路有之
一 冷汁と振子にて切候ハ右の手小蔓の
中指と指をかけて不急して抜行時甚を
右乃大指にて抱の蔓へ指添忍しまき
時ハ左ニ少石ハ小懐右小着と指ても居へ小
者右小抱と指てハ手向ひて急度と申
つかまへし一篇にハ在守候へ
一 脇指抜の事 光かろと恐違ひ、脱
ト指をかけ出す紐いて抜き之へし次ハ
二の指之の指をさしへし左右大指の抜き

極内哉と云者ハ向ひ来人を論ふやる敵ハ
随之ハし刀の小尻と氣をして立へし
其後ニて目を付ル柱尺と寸附を有ル也
未在ニ在る小在やう言の付ハ未在持つも
心者身之一箇條ハ口伝ニ定ル防

一 脇と振る時ハ文さる敵もし也紀在處小
てハ名小引迄知ぬてハ得る抜さぬ也

実無し何哉無の心持従時宜にて違

一箇條ハ口伝ニ定ル防

一 無事所方敵の心ニ構と在所より掛時と
さよこゝらけとして敵指の下分
二尺程先を見るへし其より目付の遠さ
ハ拙尽と手法ニ有能心得へし

一 何の構と無しにも敵旅の所より

まるし万事見損ニ而行ニ根有行無之
一 五ツ諸迄居ル時ハ足ツ目と出居と二の居
に掛て居文六ツ目ハ出居と二の居に至て居迄
一 両面ハ六ツ居と有し一ツ振し賞玩し対く
七ツ居と七手迄し七ツ居かと立ん迄
目文七ツ居居まし口傳有し何歟付有る
随意し

一 茶の食又ハ満ちてし六ツ居と居ル時ハ
一振賞玩く立とハ何人迄今有し立も
他川梅ハ川前分哉度くし加見し出居
二ニ居茶のとしく
一 於敷中正月十日の間ハ七ツ居と有しく
御成ニ付て御家六ケ敷儀ハ常の人
一 六ツ居まて宜しく

一 膳と云は中指の名に付ける事に数也
二三の指ハ添して用ゐる事にて有也
是ハ二三とも用ひ毎々中指とも用る
一 或ハ箸の持様を取様に用て一二の指ハ
以前へ一通り之取事成るへし中指も掛て
持事ハへし未だ二の御手也しかと
二三の指にて持て食て用る
一 貴人にハ盃の始を受へし御亭主の事気
相伴衆へ亭主ハいたすへし
一 食の膳を進められ候の事又大名衆小身衆の方
食膳を並ぶるに亭主の御前ハ先の膳を
賞翫して御膳の下を取て取様し
食と云へ文字それの事を申候也
貴人と亭主右の上を賞翫して候と取合の事

入れのよしを定て候ゟ有るとへしは悪

物吟味之事

一 脇に句ひ付の事 吉日小袖を着ての事宜
かすこかゝる所に大事の深き事しきれの哉を
先寄絡ゟ論ゟ付ゟ縁を離て出るを
是のおはに悪きとて人の人の心構候
先義吟味事悪し 又付合ゟ候へ下

沖酒ありて寄るへし 是付ゟ大概所要く
一 濁清の時は先濁と清て云ふ合着とる
吟色し 付は手出吟へし 付を取てもの
有るか又濁清には付を求進むることまゝ
一 葉吟味の事 濁清に付は先其者の吃を吟
へしされし合せ付に吟には可くすなへし
余葉吟付は白紙着ものよこに取る吟へし

一 湯漬の時湯をもて湯を呑時ハ箸を置
すして湯斗飲へし右の時ハよしと
湯の中にハてしい箸

一 食の時先飯を取扱のしる少宛二三箸を拾
乃而ニ角ニ盛へし其時汁ハ箸をとり件
是持さる心へ持汁ハいう口持有へ出
汁人ハ大形飲ニ及ハず又時宜にも寄へし

一 香の物喰扱の事少宛二箸三箸喰扱
汁と平皿吸物と喰ハ又以前のことく喰
二之膳菜と喰物汁ともの先程と同し又
和交と喰物ニて後段其と喰へし喰

一 納も喰物の菓子ニて納置し

一 二之汁喰扱の事二の膳ハ箸と取也
右ニて其又喰其後し汁と吸物を

吟之文句ハ其様し下ニ座候し二ハ出ヽ
有之候而也し何茂無之候ハヽ可然候

一 右條書之儀ハ謡の内吟之謡出候ハヽ
其節吟之様子し葬送之ハ大ニ可申

一 薬吟候の事二色も三色も一度ニ吟候と
其声様子ニ而御座候夜者一通吟候而
今度之節吟ニ而も後何而も前を其御座候

一 小謡ハ謡候ニ吟之節と出して詰候を居て
後者も出候而御文字ニ御座候之趣ニ而
無之候而も其段出候而御文字ニ細判ニ而
居ル節ハ小吟候と相申と候ニ而其吟候を出候
候し候一節ハ其定候ても不動申
其他中ニ而吟候て出候而斗ニ可申
式の振舞ニも有之候

一 和付人発声する時ハ初句二三とよみ
揚時御前ハ二の句と三句の際へ一秘
事ハ二の句と三句と小揚ハ下人声人
同しくのやうに発し一の句の句を
初句に移し発声ハ初句のうち
うち〳〵に初句ならびに二の句を
上下に移してこの句を発声中より

一 每句へ渡すへし但近代ハ中の句に
二三ハ其初句中より句を右の所に
一 ハ下ケ文ニ渡すへし其ハ大声に
一 かまへて吟詠の事貴人の御前にて
音をわか出し大声あけ
一 これへこれ移しすぐる処を右の手に
吟し出すかゝる所ハ先吟詠以下の

前出ては縁を取へし若出て余る為し

一 吸汁の事ならぬ縁出る取へしけると

うけ取吸汁へ合を入ても若文へ合ても

一 置色し吸汁吸汁の文く

一 合汁をとり大汁を掛置し候文二ニ

吸色有ら待ハその汁を置へし候

一 菓子出る時ハ其人にて縁ニハ公卿

又ハ足ずつ右へし胡床にハ畳の縁ニ当る

一 置し又器物の時ハ一方も出るへし

一 円座縁の事何も出ても半分余る程へし

むしろを置かすして楊枝と云縁くおりて

以下ほとを候へ句楊枝しと候ひ

畳の角とて置し以とぬひもひ候

一 中うしと候中ニ置へし

一 上巻上編の序文先へ出し置其後
奥書と出すへし 一書ニ草巻次ニ雲巻
根巻々と出すへし 又附言ある條の
以下文も有へし 但前後出之書出し候
類者掛物之儀何も給 以後有へく

一 上編の文一書ニ備後次ニ其編にて候
といふあるへし

一 二巻二編の付先へ出し置其後奥
次草巻々根雲巻ニて候ニ準此根編と出すへし

一 巻々一編の付も先へ出し置其後奥
次本草巻ニて編ニ出すへし

一 同上巻上編に於ゐる事初巻ニ出候巻
有之 根段
其勝の

二番目ハ出しかさゝとの冷し物ニ而二番
目ハ冷物冷汁者ニ付膳部を出し候へし
其ハ汁なくて箸を添ルものにて二付
なれ汁を交て出し桶ニ入右間ニ而見て
膳部を添て出し割ニす也しつゝ割ニ壱を
汁の器ハ冷し色し桶箸持てかへを様ニ入
丸のまゝ持冷し色しまて汁を出すハ
箸持て出し其せ汁を桶に汲置し能
其人分ハ汁を汲てから能々冷し時分
一度ニハ出さず壱人ハ二度ニハ能也
汲ても出し候ても膳部の上へ
昔ハ素麺をわけて也汁ハ膳部の外ニ
様ニ下に而取し而の皿を取て出し候上
麺を出し候へ也 扨冷汁出して付麺のみ

みて出すなるは後世合へ遣すべし也の
形と一色へ冷え遣し但若人ハ於掛すへし
座敷ハ於ハとものにて不及例なるへき
子モくハ此頃ニ低俗とありへし

一 那葉のすり昭ニ俗成出ミへし大盛
しかるハ停止の那葉ニきて曲かれハ真の
那葉ハ但大曲大ありこころもちと変り

那葉と名付へし若人分とハ若きと出来
底人ハいか様にも取変ありべし底意ある
不肝要也

一 落花の付ニ浅黄ニ薄着萌しても
池なと出来へし浅黄ニ薄着ハ浅黄とめく
此対ニ若枯かりし年ニて冷え遣し此也
段々しるを俗雅人ハ冷えかしハこ冷れも

宜しく又は置ても宜るべし

一 目録と携る時御前に置のごとく相付ハ
添書の帋と目録の上ニ重て一度ニ
もち置し又入かしと添るへし

一 右祝言之巻之結ひかけ出る事なれハ
分にもつく門手結ひ文字との附まきて

一 其小熨斗の附けし結ひ其結ひにて結付ハ

一 熨斗小添昆布有てもよし結の事
女武士ハ半紙壱枚之包二ツ折にても
苦しからずかるへし

一 右之紙すこし鳴り結の目録小結ニ而
むすひ付ハ四ツ之縫の手へ通し右の四ツ結ヒ
結ひつけ小折にして片手へ入て目録ハ
上と下にて次と絵付てさらし上之出し

着到ハうしろを前へ半分折かへし
端を結ひてその端を結付る前のごとく
小打紙ハ二段ならしてさしむる時ハ二段結ひ結也

一 并進物折紙の事二段結ひ折紙に
包しにおさむる小打紙をきてしらう
折紙しにて結ひ并をの打紙を包へし
大分このへ分ハ其て底をさしてある也

一 瓶子の付やう結包にすへし但閉と
端て折返へし結付ひて文字ある也

一 三重結の事ハしかし小義く古記に見えたり
一重結して三重と結ひ又ハ根をあつかふ
ふるく結包し色々其の色とあつかふ也

一 御献上の物ハ結上の色を書し又ハ先体
なるものの色をなし色ハ色を入る内結

悪し時ハ秋を除なり

一　夏ハ破軍の廻来し秋ゟ未来之方
を向て春を也と云之方の向ふ時ハ冬を除

一　秋ハ破軍の廻し冬ハ未来之方の廻悪し
夏ハ冬を云へ方の向を向し時ハ冬を除く

一　冬ハ破軍之廻悪し春ゟ未来之方の廻
春し秋を後と云之方の向し時ハ夏を除く

何成けれ共破軍ある事へし早く深
者をかし稲妻子ら書立へし

一　兵粮の事人の命に随ふを第一とへし
未味たる云を右に大へし能て破軍有之

一　同陰粮の事兵け出して養へ遠ミ路て云
又合図を成養とを致して後ゟ〇の
手に居て取之の事を常学を約し

二季とも分りて吟通し紀伊守まて
前付は二季ともに分りて合吟すへし
又時宜よりも御沙汰へし
一 着服の事上の称り墨服人多かる
中と申す所に着く又京大へ書く
とてとりく定へし其しを何時人の前に
承り候様吟味被仰付と存候て頂き
ん合着とされ上の称とまつ不及合候
吟味有之着服はまけと申通りて可
一 弥吟候事ハん合と存吟へし付と
かゝ陳文分ニ而かゝし存入分し付と
一 不及付の称并年分吟味ニ而及之
同業吟候の文證上様ゟハ證付候
通し年限分上様并ニ気をかへし

一 赤飯給仕の時ハ合箸にて給仕し
強飯ニても同し事也給仕之時強飯ハ白箸と
云赤飯ハ此箸の事なりと云へし

一 粽給仕の時ハ合箸を使ふ杉草
の如くともなし其のまゝ杉にて箸を用
ゐさせ箸にて給仕し箸なき人ハ
其手にて給仕すへし汁も同し

一 桶給仕の事右ふかせて箸を添て出す
れのまゝ桶ともに湯水をそへ給仕
箸にて給仕しまた陰とも給仕し

一 又あまりの時ハ大皿盛付候の事
又水をそへ小刀を取添挿にて水一て
を其上小刀を添候而挿ともに取付
箸にて焼物を添挿の上ニ其箸にて

抔と云ふ由御中ニ鐘破ニ書へしといへは
中の何れと承度き由申けるに
流は此記事なしと云ける時文を取て
条之一地獄沙汰と地獄にあり
是は流之一則室に書ても度あり
色々と也

一 曼陀羅観音菩薩絵像の中書にて

地獄は極楽等と改補ありて有り
出来候也 但又地獄に小角と無
と事も有之 所載る小判本紙
取し絵に書之処
知之候 一 人々着像と云出し
寛弥しも文も所候へし

一 同絵像の事 先後に有所像と云文八

一　手中実名ヲ以て給ハる御文なとハ
挽擲と・お役ノ右の名ニ而宛名を書
給ハる文ハ勿論文ハ是る迄ニ
一　同文箱あり候共帰前の返書を
実名ヲ以て箱ニて給ハる文ハ中にも苦
かるしく八寸高箱をもちすはらしきを
蔵置ニて給置し候事ニ候

似得お受なり
一　同苦と存る事則御文ハ差出可申又
宛の名なり青小半時ハ若と存る之
中国の時の御状とめかし出し候ハ
よろしくはんなと存候
一　公卿に送る書状ニ而墨て御文
白紙ハ帖をさして宛の雲竪に調を

もし常の青鷹にかへしもとの形ハ
麝香にしてあれは誠に有しに京師安之
一 鷹の名寄は鴟鵂にして焼鳥にして
かくる時も爲てかの羽を作りて見し北あかなきて
公鷂にして小鳥かける時も鶴雲雀と同案也
一 鷹の名しるしには雉子を呑又鷹の名には鷹し
鶴ハ雲雀武ハ鷹の居處鷹の鶴鶉孫
と名付る鳥の名となりし鷹鳥とハ
雉子は不ハ呼ずしてさし
一 鷹の居處鶴鶉鷺の付物し仁様に
若三毛て鴻と書しし文字茶と印画し様
一 と書て鶏鷹麝香にして又力有て案て候
一 同鈴板の名又ハ小若鶏するを付と
いまだ文字にて鈴半田也して有

る為之熱気之分不残除肝要之文字也
可被候之也

一 鷹乃腹を汁にて洗付たる事を揉て細く
切かけ乾たる上にて煎候て是ハ鷹薬冷かけ
の事て雲雀ハ掛尻を洗て煎之也

一 同鷹病にハもちを入候て取かせさせ可
高田世にて大黄汁かけてまうけさせて入候て

一 わた付たる茗をたれ延し焼鳥同前ニ
冷置し同ささ小麦炒を小石て煎事も
有之同文汁を乾れわた付ハよく煎さ酒
入て小て冷を後を茗ても冷也
又入なしさる也

一 鷹の腹病薬を汁にさる事黒ミ

一 其足に腫割取候事 田にして弦

少シ割色しすこし割り候大根
候の付ては強き高割ことして
に後何少しも割へし又押割地掛
小房香の大豆と添おるへし候

一 同膾拵の事者のとし変てう
葉と盛て如ニ色し同葉ハ香の
大豆用にて又大根の香にて一切ニ居候

一 膾拵の事ハ合膳ともに押出し進み
掛り口をとれよ盛の葉を添へて膾
に浸候と膾色し候ハ添てとも
葉ハのあしらひの居置候て木葉
細小盛に入て文なし葉入候

小笠原大膳大夫
長時

同 右近丞
貞慶

右廿一冊者雖為秘事依所
望深懇記進之条努々不可有
外見者也

氷端卜也
之成

横山三郎左衛門
時連

早川藤兵衛

原田清内
為達

村田小平次
之陳

村田小平太

信奉



寳暦拾三癸未年六月



津村伝次郎殿



H+K 2

GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart

15.01.2002